

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520808

研究課題名(和文) 両宋間の政治空間の変質に関する研究

研究課題名(英文) Changes in Political Space between the Northern Song and the Southern Song

研究代表者

平田 茂樹(Hirata, Shigeki)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90228784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：宋代政治に関する学上の異なる見解「君主独裁制」と「宰相専権」について再検討を試み、次の結論を得た。マクロ的な観点からすれば、北宋の軍事、財政を首都に集中させる中央集権的な「開封システム」から南宋の軍事、財政を首都を含めて数カ所に分散させ、「路」官に強大な権限を与える、分権的な「杭州システム」という政治システムの変化が生じたものの、より上位に位置する君主独裁政治体制は北宋から南宋を通じて大きな変化はなかった。一方、ミクロな視点からすれば皇帝と官僚との関係性或いは皇帝権力をとりまく政策決定の方式には変化が生じ、君主独裁政治のある部分を機能不全に陥らせ、専権宰相による権力の壟断を招くこととなった。

研究成果の概要(英文)：I attempted to reconcile the two arguments：imperial autocracy versus the rising power of grand councilors. If we take the macroscopic perspective of looking at the political system, it changed from the Northern Song “Kaifeng System” into the Southern Song “Hangzhou system.” The former refers to a centralized system, where the military and financial systems were concentrated in Kaifeng; and the latter refers to a decentralized, lower-level government system, where the military and financial power were dispersed in several places including the capital, and where circuit officials were endowed considerable authority. At the higher level of the system of imperial autocracy, however, there was not much change during the Song period. On the other hand, however, if we take a microscopic perspective, changes took place in nature of the relations between the emperor and officials, as well as in the methods of policy making, which were closely connected to imperial power.

研究分野：中国政治史

キーワード：政治空間 君主独裁政治 宰相専権 開封システム 杭州システム

1. 研究開始当初の背景

日本の学界では内藤湖南、宮崎市定両氏が唐宋時代の政治の変化について唐代の「貴族政治」から宋代の「君主独裁政治」への転換として捉えるように、宋代は「皇帝権」が強化されていく時代として理解されている。海外でも同様な見解を持つ研究者は多いが、王瑞来「論宋代相権」(『歴史研究』2, 1985年)に見られるように南宋の専権宰相が続出する現象に着目し、「宰相権」が強化されていくとする研究も見られ、両説に対して明確な解答は出されていない。前者が皇帝を中心とした中央集権的官僚制の発達に焦点を定めたのに対し、後者は専権宰相という個人の権力の問題に着目するという違いがあり、議論がかみ合っていない。これは政治をどう考えるという課題に行き着く問題であり、研究実施者は政治の「場」に焦点を定めることによって解決可能となると考えられる。

御前会議については、例えば朱瑞熙『中国政治制度通史 第六卷 宋史』(人民出版社)に代表される制度史的研究は存在している。しかし、実施者がめざす研究は、御前会議や宰相・執政会議といった政策決定過程のどのような場、どのような段階において、皇帝と官僚がどのように接触し、そしてその行為を通して政策決定がどのように行われたかという動態的分析の研究であり、かつその視点よりかねてより宋代史の学界で懸案となってきた北宋、南宋間の政治の変化に対して検討を試みるものである。

実施者はこれまで、政治を官僚制度や官僚機構といった制度史的な視点ではなく、政治的空間、政治的時間、政治的コミュニケーションといった、皇帝や官僚がいつ、どこで、何を、どのようにして政治の実現を目指すのかについて一貫して研究を進めてきた。

また、近年、北京大学の鄧小南教授、長庚大学(台湾)の黄寛重教授、中山大学の曹家齊教授らと「唐宋時代の文書伝達と情報コミュニケーション」に関する共同プロジェクトを進め、2007年9月には北京大学にて「唐

宋時期的文書伝達与信息溝通」の国際シンポジウム、2008年7月には雲南大学にて「宋時期的文書伝達与信息溝通」の国際シンポジウム、2009年3月には中山大学にて「古代中国国家運用機制」の国際シンポジウム、2009年8月には台湾中央研究院にて「新政治史研究的展望」の国際シンポジウム、2010年3月には北京大学にて「文書・政令・情報溝通」国際シンポジウム、8月には武漢大学にて「宋代行政運作的日常秩序」の国際シンポジウムを共同開催し、その成果を北京大学出版社から公刊した。これらの共同研究を通じて、唐から宋へどのように文書伝達や情報コミュニケーションが変化していったのか、一定程度の成果を得ており、上述の外国人研究者と当該問題についてさらに北宋から南宋へどのように展開していくのか、政治空間の問題を併せて論ずる形で計画を立てた。

2. 研究の目的

(1) 概要

今回の課題「両宋間の政治空間の変質に関する研究」は、アメリカの政治学者 H.D.ラスエルが政治の原理を「誰が、何を、いつ、どのようにして手に入れるのか」にあるかと述べた考え方に依拠し、具体的には御前会議、宰相・執政会議の問題を取りあげ、「皇帝と官僚たちが、いつ、どこでどのように接触し、政策決定を行ったか」という視点から、北宋、南宋間の政治の変化を探ろうというものである。この主体、時間、空間、過程というキーワード分析を行う作業を通じて、学界でかねてより論議されている両宋間の政治上の変化、すなわち「皇帝権」が強化されていく、「宰相権」が強化されていくとする、とする相対立する両説に対し、明確な答えを提出することを目的としている。

(2) 具体的な目標

今回は二つのことを目指している。

第一は、宋代の「御前会議」と「宰相・執政会議」がどのように連動しながら政策決定が行われるのか、これらの政策決定プロセスを解明するとともに、これらに関わる官僚がどのように文書や直接的な対面などによる政治的接触を行うことができ、それが政策決定にどのように反映されるかを明らかにする。その場合、皇帝、宰執、台諫、宦官、女官などの政治的ファクターがどのような段階、どのような場において接触をすることが可能であったのかに注意を向け、これまで行ってきた皇帝と官僚との接触並びにコミュニケーションの研究成果と結びつけることにより、政治過程の全体構造を明らかにする。

第二は北宋から南宋へどのように政治がどのように変化していったかを明らかにする。近年アメリカを中心として、北宋から南宋にかけての社会、文化の変化に関する研究の蓄積が進んでいる。今回は政治の場に焦点を当てる試みにより、どのように段階を経て変化していったかを解明する。

3. 研究の方法

(1) 概要

本研究は、3年計画で進めていく。国内では単独で研究を進めると同時に、海外で進行中の研究プロジェクトとも協力し、共同研究を進めていく。具体的には、第一に各種政治日記を史料としながら北宋から南宋にかけての政治の場、具体的には「御前会議」と「宰相・執政会議」に焦点をあてつつ、その方式の変化を解明する。第二は、政策決定過程は上記の「会議」のやりとりに加えて、会議以外には各種の文書のやりとりや直接的な政治的接触が重要な要素となる。これらの問題をあわせて論じることによって動態的な政治過程の全貌を明らかにする。以上の分析の成果とこれまで得られた皇帝と官僚との政治的接触の分析成果をとりまとめ、北宋から南宋にかけての政治の変化を明らかにする。

(2) 具体的な計画

実施者は次の二点を中心に研究を進める。

宋代は、唐代までには余りみられなかった高官によって多くの政治日記が書かれた時代である。これらの日記は、『実録』の基本資料とされるなど宋代の政治を考察する上できわめて重要な史料であるとともに、皇帝と官僚との政治的接触について豊富な記載がされており、とりわけ「御前会議」、「宰相・執政会議」を考察する上で欠かすことのできない一級資料である。実施者はこれまで宋代の政治日記について分析を行っており、今回はこれまでの成果を踏まえつつ、北宋と南宋を代表する幾つかの日記を分析の俎上にあげ、これらを比較対象とする形で北宋から南宋にかけての政治の「場」の変化を解明する。これまで御筆研究は制度史的な方向から研究が進められてきたが、具体的にどのような問題が御筆によってやりとりがされ、処理されていたのか、その文書のやりとりと上述の会議がどのように有機的な関係性を持っていたのか、

などの諸点が未だに明らかにされていない。こうした問題解明には南宋の文集に残されている御筆の分析及び随筆・雑記の史料分析が不可欠である。

実施者は国内で研究を進めるとともに、海外の研究協力者として北京大学の鄧小南教授、中山大学の曹家齐教授、復旦大学の余蔚副教授、四川師範大学の王化雨副教授の参加を予定している。これらの研究者は「政治的空間変化と政治運行」に関する国際共同研究プロジェクトを進めており、申請者はその計画に加わる形で共同研究を進める。

4. 研究成果

研究計画に基づき、両宋間の政治空間の変質について検討を試み、以下の結論を得た。

(1) 政治空間の変質

宋代史研究に於いては、宋代は高度に発達した中央集権的官僚制に基づき皇帝が最終的な決裁を行う体制、すなわち君主独裁政治の時代とする見解が存在する一方、北宋末頃より絶え間なく専権宰相が出現する現象に目を向け、宋代は宰相権力が強化された時代だとする考え方も存在している。両者の考え方には、前者がマクロ的な政治の変化に目を向けているのに対し、後者はよりミクロ的な観点から政治の変化を捉えようとする違いが存在している。本論文はこうした両者の考えを統合的に解釈しうる方法として、両宋間の政治空間の変化、具体的には皇帝と官僚間の関係性の変化、あるいは皇帝権力と深く関わる政策決定方式の変化について、北宋・南宋の日記資料、魏了翁「応詔封事」の史料、南宋の手紙資料を中心に分析を試みたものである。その分析の結果、得られた成果は以下の通りである。

魏了翁は「応詔封事」の中で、政治の変化を次のように捉えている。北宋の熙寧・元豊期の新法改革を経て、南宋の秦檜、韓侂胄、史彌遠の専権宰相時代への展開を大きな変革期として捉え、特定の宰執あるいは宰執に関わる特定機関への権力集中と、それに対応する形で「侍從」、「台諫」、「経筵」、「制誥」、「聴言」などの諸機能が低下し、皇帝と官僚を繋ぐ体制が弱体化したと整理する。言い換

えれば、皇帝が関与する空間の縮小が南宋の専権宰相の政治を招いていくのである。

この変化を端的に現しているのが皇帝の前で行われる御前会議である。皇帝が政務を執る「視朝」の儀礼には「常朝」(皇帝に対する官僚の挨拶「起居」)と「聴政」(皇帝が官僚とやりとりしながら決済を行う)とがあり、唐代の後半頃より両者が分離する傾向となり、「聴政」すなわち御前会議の場の重要性が増してゆく。宋代は唐代後半の流れを受け継ぎつつ、皇帝が宮殿を移動しながら、多様な官僚と各種の「対」(官僚が皇帝の面前で意見を申し上げる制度)を行う御前会議の方式が発達してゆく。そのやり方は「分班奏事」と「合班奏事」とに分かれる。北宋前半期に展開した御前會議の「分班奏事」(幾つかのグループに分けて皇帝の面前で順次、入れ替え方式にを用いて上奏させる方式)は多くの異なる官僚から意見を聴取するやり方であったが、1080年代の元豊官制改革を経て成立した「合班奏事」(一つのグループで皇帝の面前で上奏させる方式)は、他の官僚を極力排除し、宰相と皇帝間のパイプ、とりわけ特定の宰相との関係性を強くする方向に向かった。丁度、時期を同じくして北宋末から皇帝と宰執間の文書の遣り取りによる政策決定の方法である「御筆手詔」の方法が発達してくる。御筆手詔の方式は従来の三省六部を中心とした文書処理を皇帝、宰執間による決裁方式に変えるものであった。

以上の整理をもとに、学界で異なる意見として出されている君主独裁政治論と宰相権力強化の二説について整合的な解釈を試みれば次の通りである。マクロ的な視点である政治システムという観点からすれば、北宋の軍事、財政のシステムを首都開封に集中させる中央集権的な「開封システム」から南宋の軍事、財政を首都杭州を含めて数カ所に分散させ、「路」官に強大な権限を与える、分権的な「杭州システム」という下位の政治シス

テムの変化は起こったものの、より上位に位置する君主独裁政治の体制は北宋から南宋を通じて大きな変化はなかった。一方、ミクロな視点からすれば皇帝と官僚との関係性、あるいは皇帝権力をとりまく政策決定の方式には変化が生じ、君主独裁政治のある部分を機能不全に陥らせ、専権宰相による権力の壟断を招くこととなった。

(2)宋代政治史料としての手紙の有効性

これまで宋代政治史は『宋史』『続資治通鑑長編』『建炎以来繫年要録』といった正史、実録系史料、もしくは『宋会要輯稿』『文献通考』といった会要、政書系の史料を主たる材料として研究を進めてきた。これらの史料は依然として最重要史料としての位置を失っていないが、とりわけ南宋の後半の状況を明らかにするためには文集などの新史料の活用が不可欠となっている。今回は当該課題を検討する上で、新たに手紙資料に関して新たな可能性を追求した。宋代以降の社会についてしばしば「科挙社会」という言葉が用いられるように、彼らの活動の背後には科挙や官僚制の仕組みが存在し、これらと密接に関わっている。たとえば、当時の官僚制社会において出世するためには、一定の任期を勤め上げると共に、同時に絶えず上司や高官の推薦を獲得する必要があった。文集に推薦に関わる「拳状」や「謝啓」が数多く見いだされるのも、この仕組みからすれば当然と言える。南宋士大夫の文集の中には、当時の科挙の仕組み、薦挙の仕組みと関わるものが多く存在しており、これらの「システム」を念頭に置きながら読み進める必要がある。また、宋代は北宋から南宋へと、政治の「システム」が大きく転換した時代とみることができる。北宋が開封を中心とした中央集権的な体制であるとしたならば、南宋は、制置使、総領所、宣撫使、都督府などの軍事、財政と深く関わる巨大な地方官府が発達した時代であり、より分権的な様相を見せる。また、領土が半分

となったこともあり、首都と地域社会との関係がより密接となって行く。南宋におけるローカルエリートが発達の問題もこの文脈から読み取ることできる。さらに北宋と比べて専権宰相が次々に現れた時代でもある。今回の「書」の分析を見る限り、公式な文書のやりとりをする一方、同時に、宰相、制置使など南宋の核となる官司もしくはその官司の長官と絶えず手紙のやりとりを行い、公式文書と手紙という二つを巧みに用いながら、政治運営を行っている。北宋の政治過程においてはこれほどはっきりした手紙の政治的効用を見いだすことは難しい。南宋における手紙の効用の増大は、とりもなおさず南宋の分権的な政治体制、および皇帝を中心とした政治運営の瓦解と専権宰相の権力掌握の問題と深く関わっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

平田茂樹、宋代政治史研究の新視野-以科舉社會的“人際網絡”為線、史学月刊 401号、査読有、2014、22-27

平田茂樹、兩宋間の政治空間の変化について 魏了翁「応封詔事」を手がかりとして、東洋史研究 72巻3号、査読有、2013、59-93

平田茂樹、從選挙論争看元祐时代的政治、河南大學学報(社会科学版)2012年4月号、査読有、2012、91-99

〔学会発表〕(計 8件)

平田茂樹、宋代科挙社会的人際網絡、Letters and Notebooks as Sources for Elite Communication in Chinese History, 900-1300 (於イギリス・オックスフォード大学) 2014年1月9日

平田茂樹、宋代書信的な政治功用-以魏了翁『鶴山先生大全集』為線索、CONFERENCE ON MIDDLE PERIOD CHINA, 800-1400 九至十五世紀的中國會議 (於アメリカ、ハーバード大学) 2014年6月6日

平田茂樹、宋代書信的な政治功用-以魏了翁『鶴山先生大全集』為線索、“10至13世紀中国国家与社会” 國際學術研討會暨中国宋史研究会第十六届年会 (於中国・杭州市) 2014年8月21日

平田茂樹、由『夷堅志』看宋代獵取官職的世界、2014年筆記與宋人的知識建構工作坊 (於台湾・清華大学) 2014年12月5日

平田茂樹、兩宋間政治的变化、「宋代政治史研究的新視野」 國際學術研討會 (於中国・北京大学) 2013年9月2日

平田茂樹、宋代科挙社会的網絡、「近代東亞城市的社會群體與社會網絡」 國際學術研討會 (於台湾・中央研究院) 2012年7月25日

平田茂樹、兩宋間政治空間的变化-以魏了翁“ 応詔封事 ” 為線索、‘ 宋都開封與十至十三世紀中國史 ’ 國際學術研討會暨中国宋史研究会第十五届年会 (於中国・開封市) 2012年8月21日

平田茂樹、宋代科挙社会的網絡、十至十三世紀中國的政治、文化與社會學術研討會暨嶺南南宋史研究会第三屆年会 (於香港・嶺南大学) 2012年12月18日

〔図書〕(計 1件)

平田茂樹 他、外交資料から見た十~十四世紀を探る、汲古書院、2013、396

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平田茂樹 (HIRATA Shigeki)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90228784